

教授者から支援者への視点の転換

— 生涯学習につながる美術教育を目指して —

研究指導主事 中川 賀 照
Nakagawa Yoshiteru

要 旨

高等学校において、美術の授業の進め方や題材の設定などに、指導者の意図するところと学ぶ側の興味や関心とのずれを感じることもある。美術による創造活動は、生涯を通して親しみ、自らを表現するための一つ的手段として位置づけ、それらを達成できる環境づくりと、支援や助言の在り方が大切であると考え、誰もが表現することの喜びを互いに認め、感じ合える支援の在り方と教材開発について研究を行った。

キーワード： 美術教育、支援、生涯学習、関心・意欲、発泡スチレンボード

1 はじめに

芸術科の目標は「芸術的な能力を伸ばし、美に対する感性を高めるとともに、生涯にわたって芸術を愛好する心情を育て、豊かな情操を養う。」ことにある。生涯を通して、心身ともに豊かな生活を送りたいと願うようになってきた昨今、図らずもそれが美術教育の目指してきた目標と合致していることは、この教育の果たす役割と重要性を改めて感じさせる。特に情操にかかわる教育は、その指導方法により、興味や関心の持ち方や主体的に取り組もうとする意欲を育てることと大きくかかわる。

ここでは発泡スチレンボードを取り上げ、興味・関心の多様化した高校生が、素材の持つ新規性と無限の可能性を体験の中から感じ、意欲をもって創造的な活動を行える教材の開発をしたい。

2 研究目的

- (1) 教授者から支援者への意識の変革を図る方途
- (2) 多様な発想を呼び起こす教材の開発
- (3) 生涯学習に発展する美術教育の在り方の考察

3 研究方法

- (1) 全体指導と個別指導における効果の在り方を、集団心理や個々の精神的な発達欲求の理解を通して考察する。
- (2) 発泡スチレンボードを使った教材の開発と、それを通して発想が広がり創意工夫しようとする意欲を起こさせる授業展開を工夫する。
- (3) 生涯学習を考える上で、最も大切だと思われる創造的活動へと結びつく美術教育の在り方を、創造への要求の起こり方から考察する。

4 研究内容

(1) 創造的発達過程について

ア 創造的活動の発達欲求と心理的発達

年齢	11	12	13	14	15	16	17
児童画の発達要求	ト ム リ ソ ン	写実化（リアリゼイション） と覚醒の段階 思春期と時を同じくする					
	ロ ウ エ ル ド	疑似写実 的段階 - 推理の 段階 -	決定の時期 - 創作活動にみられる 青年期の危機 -				
心理的発達	ホ ル マ レ イ ソ	協同の時代 - 最後の 過渡期 -	協同の時代 - 思春期 -				

「美術教育の名言」より抜粋

・文部省初等中等教育局高等学校課遠藤友麗教科調査官の所見

人間は経験しないことは頭に浮かんでこないし、心にも感じない。感性は育てなければ豊かにならない。感じようとする心で観なければ何も見えてこないのである。最近、描写にイラスト画などが多くなっているのは、自分で体験することが少なくなってきたことが要因と考えられる。10歳前までの豊富な経験と楽しい夢が、青年期の観察的、感性的な経験の豊かさを大きく左右する。

ウ 創造力が育ちにくいわけと、創造の3つのタイプ

創造の前には常にイマジネーションがある。現在、想像力のよく伸びる幼児期に、母親から昔話や童話を聞かされることが少なくなる傾向がみられ、お話を頭の中で視覚イメージに置き換える訓練ができていないことも創造力が乏しいといわれる原因と考えられる。一般的に、思春期になると子どもらしい自由な表現が少なくなってくる。自分の作品を批判的にみるだけでなく、自分自身に

イ 高校生の精神的発達段階

青年期の危機といわれる中学校時代は、自我の意識が強くなり、感情の起伏が激しくなったり友達との敵対感情も生まれたりするなど、大人への転換期であり、自我の確立を目指す最も不安定な時期でもある。巧みな手工によって視覚的な再現を試みたりするが、それがかえって創造的表現能力のつまずきとして作用することが多い。そんな時期を経て、自己の理想的思考と抽象能力が一層高まる高校時代を迎える。リアルな表現に加えて表現の多様化と深まりが進む。しかし、中学校時代に受けた心の傷の深さが、容易に回復しない場合もある。写実的、視覚的な表現への失望から、創造的活動全体に意欲を失ってしまうのである。

屈折から生まれた暗い自己表現よりも、夢と希望にあふれた輝かしい自己表現になるよう手助けをしたいものである。

・シュタイナー教育の考え方

14歳から21歳までの教育で一番大切なことは、因果関係に関する様々な問題を学習できるようにすることと、外に対する適応力を身に付けさせることである。ドラマチックな変身が15歳ごろに起こる。そうでない場合はどこか心の病が生じていると考えられる。学習の過程で、十代の子どもはこの世に生きることを実感できるようにすべきである。

対しても批判的になる結果、今までの子どもらしさが消え、概念的な面がウェートを占める。子どもの創造性がある時期を境にして急速に変貌していく。その時、知的なものを早く子どもに教え込もうとすると、その代償として何かを失うことになる。

表現の傾向として以下のように①視覚的②感覚的③装飾的な3つのタイプに分けることができる。

①視覚的にとらえるタイプは、題材が変わっても表現形式はほとんど変わらない。側面的なところに視点を固定して基底線を設け、空間を広くし、小さめの形態にする特徴がある。また、対象を空間の中で認識するという立場でとらえているようである。

②感覚的に表すタイプは直感的で早描きであり、細部にこだわらず端的に対象を捉える傾向がある。また、ひらめきを呼び込んで表現に生かすようである。

③装飾的に表すタイプは、常に多彩ですべてのものを楽しく飾ろうとする。形態は現実離れした装飾的な創造の感じが強く表れ、羅列的な描き方となりワイドな表現である。

その他に視覚的な面と感覚的な面との間にあって揺れ動いている場合がある。これらのことを知っておくと、その生徒のタイプに合わない表現を要求することによって生ずる問題や、やる気を失わせる題材設定を避けることができ、生徒の個性に応じた表現を伸ばす適切な援助ができると考える。

エ 全体指導において留意したい事項

集団の中でほめるときは、一般にうまいとされる模範的なものではない方がよいようで、誰もが共感できる要素が含まれているか、驚くような斬新なアイデアや発想を紹介すると効果的である。

興味・意欲などを喚起するプラスの要素を持つエネルギーや、逆にやる気を削ぐマイナスの要素のエネルギーさえも、全体の中では伝染しやすい。教師自身が極力本音で語りかけ、教訓や押しつけにならないようにし、集団からわき起こるエネルギーをうまく活用できると、援助も生きてくると思われる。集団指導では、皆に同じ考えを植えつけるという目的ではなく、人と違ったその人自身の表現や考え方を大切にすることを奨励したい。

美術教室での教師の最も重要な役割は、創造的雰囲気を作り出すことであろう。優れた指導者にはそれぞれ独自の下ごしらえの苦心があることを忘れてはならない。すべてのことを教えてしまおうとしないことである。たとえ小さな発見でも、自分で見つけた喜びはかけがえがないものである。

オ 個人指導で気を付けたいこと

絵をけなすことはその生徒をけなすことであり、絵をほめることはその生徒をほめることである。今、この生徒は何を考えているのか、何を迷っているのかを察知し、それらを解決できるように個々に話しかけ、その生徒の世界が開かれるよう手助けをしてやれることが必要なのである。そうすることによって自信を取り戻し、描こうとする意欲が高まり、迷っていた生徒も積極的に筆を取り上げるようになる。絵が描けなくてじっとしている生徒は、“素直に自己表現ができない”ということを経験で自己表現していると解釈できる。

自信を持って熱中して描いている生徒に対して、過ぎた指導はいらないようである。そばにいて関心を寄せるだけで充分で、自然な表現に賞賛を与えたら、生徒は楽しく自信を持って描き続けるものである。

カ 支援や援助の精神と効果について

生徒自身が「分かる、楽しい、納得のいく学習」と思う5つの視点を挙げてみた。

①強い感動に基づく表現活動か。

- ②表現目標を主体的に把握させているか。
- ③生徒の力で目標の達成度が確かめられるようになっているか。
- ④個性や能力を伸ばす指導を重視しているか。
- ⑤美的・創造的活動を確かめ合う場を重視しているか。

生徒が自分自身で見つけだせたと思えることが大切で、そのことが大きな自信となり、次へのやる気へとつなぐことができたり、技能の向上や心情の充実に結びつく。それらの気持ちを起こさせるためには待つことが重要であろう。支援とは耐えることだといっても過言ではないと思う。また、うまい教え方とは「教えなかったように教える。」ことと考える。積極的に教える方が楽である。すぐに答えないで、自分で見つけようとする気持ちにさせていくことは、教えることの何倍も根気のいる仕事である。学ぶのは生徒自らの問題であり、教師は学問や芸術への旅の案内人であり、作品作りの過程は、喜怒哀楽の感情の起伏を伴った人生の縮図ともいえ、自己克服の過程でもあると受けとめたい。人は半歩先にある目標に魅力を感じるもので、そんなテーマ・用具や用材を設定することが、実現できそうな気持ちにさせ挑戦する意欲を起こさせる。

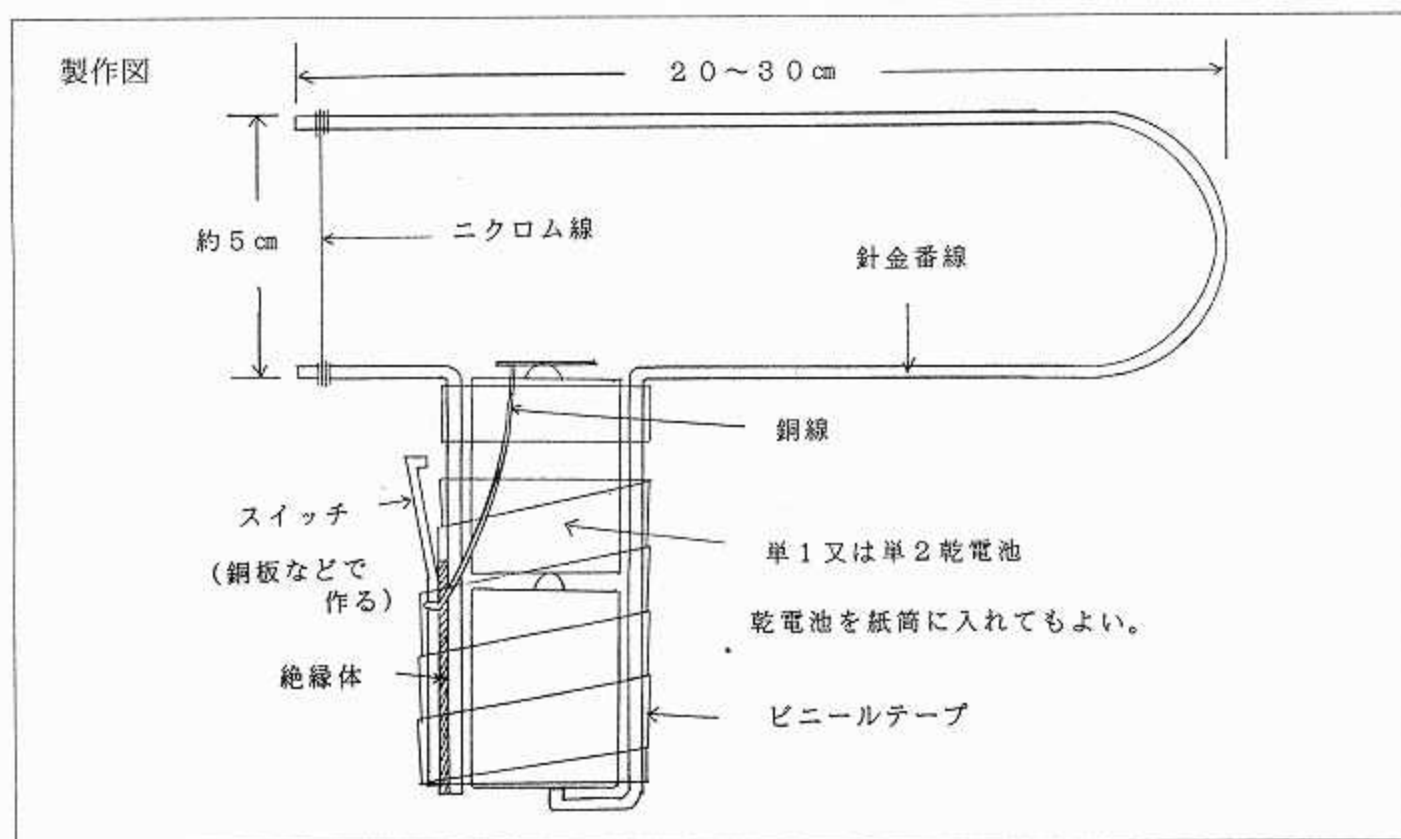
(2) 発泡スチレンボードを使った教材開発

ア 発泡スチロールの特徴

発泡スチロールは日常生活の中で様々な用途に使用されている。運搬用の梱包材、建築や冷蔵庫の断熱材等が挙げられる。軽くて加工が容易であり、ここでは一定の厚みにした板状の物を使う。

イ スチロールカッターの製作

ニクロム線は通電すると発熱する。その熱によって切断加工を行うと刃物などで表せない繊細な細工と表現が可能となる。安価で市販されているが簡単な構造なので自作させ、この題材への興味を深めさせたい。



ウ 指導展開例

題材名「写真からのレリーフ」(ビジュアル・デザイン又は心象表現によるデザイン)

学習段階	主な学習活動	支援したい事柄や身に付けて欲しい力	評価
課題把握	○自分が気に入った写真を探す。 ○その写真を大切にしている理由を考えて箇条書きにしてみる。	・写真を撮った、又は撮られた情景を思い浮かべやすいように働きかける。 《自己の存在を意識し、言葉に表す力》	① ② ③
発想	○思い浮かべた言葉から膨らませたイメージをスケッチする。	・充分時間をとって、自分自身の主題を見付けられるようアドバイスする。 《イメージをスケッチする力》	②
構想	○スチレンボードを熱線等で自由に切断してみる。 ○形の重なりや組み合わせの効果を考える。 ○制作計画を立てる。	・素材の面白さを体験できるように十分な量の材料や道具を用意し、自分で可能性を見つけられる援助をする。 《思い通りに材料を扱ったり、手順を考えて技法を研究し自分のイメージに近付ける力》	④ ⑤
制作	○ベースとなる台紙を決める。 ○スチレンボードの裏面に裏返しにした下絵を転写する。 ○転写線にこだわらず新たに形を決定し直すつもりでカットする。 ○配置を決定したものをスチレンボードで貼っていく。 ○他の描画材料で表現を補う。	・表現しようとしたものを大切にしながら、制作中に気付いたアイデアを取り入れる柔軟さを持てるように支援をする。 (切りくずの中に予期しない面白い形ができることがあるので残すようにする) ・スチレンボード特有の材質感や、厚みが一定で滑らかな切断面から受ける印象を生かした構成になるよう気付かせる。 《イメージを立体的に構成し、形にする力》	⑥ ⑧ ⑨
鑑賞 評価	○作品を互いに鑑賞し合い、作者の意図を感じとる。 ○表現内容の違いや努力の跡を見付け、印象に残った作品の感想を述べ合う。	・出来映えよりも制作中のエピソードや苦労した点、良かった点に注目できるよう導く。 《自他の良さや工夫を味わう力》	⑦ ⑩

〔 評価の観点 〕

- | | |
|-------------------------------------|---------------------------|
| ①写真の中でひかかれているもの、大切にしたい事柄を十分に考えられたか。 | ⑥効果的に素材を生かしているか。 |
| ②表現したいイメージがはっきりしたか。 | ⑦当初のイメージに近いものができたか。 |
| ③新しい材料や用具の理解ができたか。 | ⑧集中して制作できたか。 |
| ④自分の思うようにカットすることができるようになったか。 | ⑨発展させて次の制作意欲を起こすことができたか。 |
| ⑤制作手順をしっかりと考えているか。 | ⑩自分が写真に込めている思いを表すことができたか。 |

〔 作品例 〕



今までの描画法に行き詰まった生徒には、この新規の表現方法がそこから抜け出る一助となるであろう。この題材は、生徒の発想を柔軟に受けとめることによって、いろんな分野への広がりの可能性があると感じた。例えば、掲示板、モビール、ポスター、版画、立体構成、鉄への鑄造置換、共同製作、ビジュアルデザイン、シンボルマーク、建築や様々な模型工作等への応用である。

(3) 生涯学習につながる美術教育の在り方

美術の活動はコミュニケーションの一環であり、それは個人的なものだけでなくむしろ社会的な活動であろう。生涯にわたって美術を愛好する意欲や態度の高揚、美術の楽しさや喜びの実感を多く味わわせたい。学校教育は教育のゴールや完結点ではなく、生涯にわたる自己学習へのスタートとしての教育ととらえ、長い生涯に生きて働く創造活動の基礎となる確かな力を身につけ、自信をもって学習の喜びを実感でき、自発的継続的な学習意欲をもてることを目指したい。

5 研究結果と考察

これまでの教授主体の指導法から生じたと思われる諸問題の解決の方途として、支援を中心とした指導法について考察したが、これを進める中で最も大切なのは具体的な方法の云々よりも、支援者の精神にあると感じた。このことは特に生涯教育を考えるときにはっきりとしてくる。最近、高齢者の方に創作関係の講座で教える機会があった。年配の方は長い人生経験の中で豊富な体験と知識を持っておられる。こちらが教えているつもりで、逆に教えてもらうことが多々ある。また、受講者同士で互いに得たものを教え合う場面も見かけた。この時のありようはまさにお互いに支援・援助し合っている姿と言えよう。学校における教育も同様に教師と生徒とがお互いに学び合うという観点に立つことが肝要であろう。特に美術教育の指導においてはこのことが軽視されてきたようである。

6 おわりに

子どもの絵が純粹で、素直で、生き生きとしたそれらの作品が大人をいたく感動させるのは、表現技術を上まわる内的感動と、表現したい内容を持っているからである。今後は、強い感動を呼び起こす手だての工夫や、逆に悔しい思い・悲しい出来事を絵に描いて心を静める働きを持たせることができる方途を研究してみたい。受験体制の中で、心理的圧迫や消極的な行動を示す生徒が少なくない現在、生徒の伸びようとする心と、教師の育てようとする心が一致することが重要と考える。生徒の個性を生かし育てる教育は、教師自身が質的に変わり一人一人の生徒が真に人間として尊重され、徹底した生徒理解によって教育環境を変革することによって実現すると考える。

授業が終わったとき、①今日は充実してやれたな②自分として満足のいく作品ができた③美術がおもしろくなった、という実感を持たせることができるよう今後も研究を重ねたい。

参考・引用文献

- | | | | | |
|-----|-----------|------|----------------------------|-------------|
| (1) | 河合隼雄 | 1992 | 「こころの処方箋」 | 新潮社 |
| (2) | 滝本正男 島崎清海 | 1994 | 「美術教育の名言」 | 黎明書房 |
| (3) | 佐藤満 | 1990 | 月刊教育美術 9月号 | |
| | | | 「させられる学習からしたくなる学習への転換」 | 財団法人教育美術振興会 |
| (4) | 遠藤友麗 | 1993 | 月刊教育美術11月号「美術の学習指導と評価の転換を」 | 同上 |